

「中国学園小学校英語活動支援講座」(文部科学省小学校英語活動地域サポート事業)報告 (1)講座実施報告

Chugokugakuen English Activities for Elementary School

(Ministry of Education, Culture, Sports and Technology elementary school English area support project)

(1) Report on the General Outline

(2006年3月31日受理)

松畑 熙一 Kiichi Matsuhata	中野 宏 Hiroshi Nakano	名合 智子 Tomoko Nagoh	橋内 幸子 Sachiko Hashiuchi
垣見 益子 Masuko Kakehi	佐生 武彦 Takehiko Saiki	佐藤 大介 Daisuke Sato	

Key words: 「中国学園小学校英語活動支援講座」, 「文部科学省小学校英語活動地域サポート事業」, 小学校英語活動, 支援体制の確立, 実践と評価

抄 録

平成17年度に開始された「文部科学省小学校英語活動地域サポート事業」は、全国30地域を対象に募集が行われ、23地方自治体、7高等教育機関が選定された。本学は、短大としては唯一認定され、岡山県下の公立小学校教員を対象に、「中国学園小学校英語活動支援講座」として10回の講座(平成17年10月～平成18年2月)を実施した。各回の講座は、小学校英語教育に関する多方面からの講演、講義、参加教員中心のワークショップ及び実習などの多彩な活動が盛り込まれ、実際に英語活動を担当する小学校教員にとって、非常に有意義なものであった。本稿は、講座の概要、そして各講座について、時間的順序に従って報告をしたものである。

I. 序 論

「文部科学省小学校英語活動地域サポート事業」として、本学が認定された要因としては、①小学校現場が抱える地域的ニーズ、及び、②本学の英語コミュニケーション学科の児童英語教育に関する教育体制の確立という二点がある。まず、①としては、岡山県は教育県として、倉敷市が小学校英語教育の特区となっており、岡山市内の小学校でも体育や音楽などに限定したイメージング・プログラムが実施されている。今回の講座開催にあたって、岡山県教育庁、岡山市教育委員会、そして、倉敷市教育委員会との連携が実現した。次に、②として、英語コミュニケーション学科では、平成17年度以前から児童英語関連の科目をカリキュラムに持ち、当該年度には児童英語教育コースが開設された。学科の教員も英語教育における日進月歩の学問的知見を、コースを希望する

学生達に与えつつ、さらなる進展を考慮し、小学校を始めとする児童英語教育に関する地域のセンター構築を目標にしていることが評価されたものと考えている。

さて、「中国学園小学校英語活動支援講座」実施を中心とする、平成17年度における本学での活動テーマは、以下の三点、つまり、

- ①小学校における英語活動(特区においては教科としての英語)の支援、
- ②小学校などにおいて、英語活動に関するボランティア活動ができる学生の育成、
- ③小学校を中心とした地域の児童英語教育に貢献できる、知的情報センターの一つとしての本学の体制作り、であった。なお、この講座には、本学の児童英語教育コースの学生達にも適宜参加してもらい、教育現場からの多くの有意義な示唆と刺激を受けることができるようにした。

また、「中国学園小学校英語活動支援講座」の実施に

関する概要や日程及び講義活動・内容に関しては、以下のとおりである。

日時：平成17年10月8日(土)～平成18年2月18日(土)の10日間※毎回13:00から16:00までの3時間

場所：中国短期大学

講師：松畑熙一(中国学園大学・中国短期大学副学長)

中野 宏(中国短期大学英語コミュニケーション学科学科長)

名合智子(中国短期大学非常勤講師)

スコット・チャドウィック(ノートルダム清心女子大学附属小学校教諭)

佐藤大介(岡山大学教育学部附属中学校講師)

柏野恵理子(岡山市立岡山中央小学校教諭)

藤井佐代子(岡山市立西小学校教諭)

講座形式：児童英語教育の専門家による講演、講義と実習、ワークショップ、など

受講料：無料

テキスト：資料配付(無料)

対象：小学校などで、英語活動や英語教育に携わる先生方(原則として各小学校1～2名程度)

定員：50名

表1 講座スケジュール

平成	月 日	回数	講 座 内 容
17年	10月8日	第1回	開講式 基調講演：「小学校英語活動の基礎・基本」 講師：松畑熙一
	10月22日	第2回	国際理解と小学校英語・自己研修の進め方
	11月12日	第3回	クラスルームイングリッシュ①・カリキュラムの立て方
	11月19日	第4回	レッスンプランの立て方・授業で役立つゲームの実習
	12月3日	第5回	発音指導①・マザーグース・歌の実習
	12月17日	第6回	発音指導②・フォニックス・チャンツの実習
18年	1月14日	第7回	英語絵本の扱い方と実習・ワークショップ
	1月28日	第8回	クラスルームイングリッシュ②・英語表現
	2月4日	第9回	モデルレッスン・課題に沿ったレッスンプランの作成
	2月18日	第10回	グループによるレッスン発表 修了式

以上のような講座に対して、参加希望の小学校関係者の数は100名以上で、50人という定員をはるかに越えるものであり、急遽、講師陣の配慮により、参加人数を77名(男性教諭9人、女性教諭68人)に増やした。参加者が勤務する小学校の地域別では、倉敷市28人、岡山市21人、瀬戸内市4人、都窪郡4人、井原市3人、総社市3人、真庭市3人、玉野市2人、津山市2人、美作市2人、高梁市1人、備前市1人、御津郡1人、吉備郡1人、和気郡1人、であった。講座は週末の土曜日午後ということもあり、その時間帯が研修や出張に重なる参加者もいて、毎回全員出席というわけではなかったが、会場がいつも盛況と感じられるほどの参加があったのは確かである。また、受付や記録のお手伝いをしてくれた学生達は、

現場の小学校教員達の熱心さに感銘を受けていた。

II. 「中国学園小学校英語活動支援講座」実施報告

1. 中国学園小学校英語活動支援講座 第1回

開講式及び基調講演：「小学校英語活動の基礎・基本」

(講師：松畑熙一)

本学の英語コミュニケーション学科学科長中野宏教授の司会による開講式の後、本学の松畑熙一副学長による基調講演があった。「小学校英語活動の基礎・基本」と題された講演では、次の五項目に大別されたテーマが展開された。

1. 英語“楽”習を目指して

2. 「自己－他者の対等関係に基づく自己表現重視の英語的発想・文化」を学ぶ
3. 英語の基礎・基本（コモン・コア）
4. 外国語学習ライフサイクル
5. 英語活動の基本的留意点

まず、「英語“楽”習」であるが、英語を楽しく学ぶことは、揺るぎない信念を持った英語教育学者として、講演者が長年主張してきた基本事項である。（詳細は、松畑熙一著『自ら学ぶ力を育てる英語授業－自己教育力の養成をめざして－』（研究社、1989）などを参照）

次に、英語学習者が留意すべきこととして、学ぶ対象の英語が、日本語・日本文化とは異なる、言語的・文化的な背景を持ち、自己表現を重視する発想がある点が強調された。

第三に、英語を教える立場として、英語の基礎・基本が確認された。英語の言語的側面として、まず

- (1) 音声面では、以下の事に留意すること。英語は、
 - ①閉音節中心、②日本語より母音が多く、似て聞こえる日本語の母音で代用して発音する傾向があること、③音素中心、④音と文字対応が1対多でフォニックスを教える必要性があること、⑤ストレス・アクセント、⑥ストレス・タイムド・リズム、⑦連続する子音、⑧2語以上の句・文では、ストレスを受ける内容語と受けない機能語があること、⑨イントネーションの種類、⑩弱音節における母音の弱化、音の脱落、同化、連結、などが特色である。
- (2) 文法体系面では、
 - ①語順の相違、②語順の果たす役割、③動詞否定と名詞否定の併用、③主語中心、④主要部先頭言語であること、
- (3) 意味・表現面では、
 - ①low context、②結論や大切なものを先に言う、③人を中心に能動的な表現を好む、④単刀直入の直接的な表現を好む、⑤多様な表現を使用、
- (4) コミュニケーション・スタイル面では、
 - ①ことばによるコミュニケーション重視、②言語表現度が高い説得文化、③自己主張重視、が挙げられた。

第四に、外国語学習ライフ・サイクルとして、0歳からの言語発達段階とその時期の留意点が示唆された。「右

脳優先期」を経て、「敏感期」（5～8歳頃）、「9歳の壁」と「臨界期仮説」、などがあり、脳を活かした勉強法もある。30代以降も、実体験などにより、学習面での効果が期待できる。結論として、年齢は言語学習に影響するが、社会的・心理的・教育的因子が第2言語習得に大きな影響を与える。

最後に、英語活動の基本的留意点が明確にされた。

- ① 「感性・知性・体性」の三位一体
 - 全身を使って表現する活動を優先させ、英語に全身で親しむことを通じて、英語を学ばせる。
 - ② ストレスやリズム重視の音声を優先させ、ゲーム感覚で学ぶ楽しさを体感させる。
 - 自然な英語の音の流れに慣れ親しむことにより、英語と日本語の音声上の類似点と相違点を認識させ、「英語らしい発音」へ導く。
 - ③ 子ども達の日常生活に密着した具体的内容を基礎として、異文化理解を新鮮な驚きの中で体験させる。
 - ④ 歌、動作化、クイズ、ゲーム、スキットなどの学習活動を重視する。
 - これも、音声優先による体験・活動を通して、子どもが自然に英語に親しみ使う機会を増やすことが大切である。
 - ⑤ 子どもの発達段階に合った活動を工夫し、上級学年などでは、知的好奇心に即した活動、例えば国際交流などを組み入れること。この段階で、文字の導入が考慮されやすいが、学習の直接的な対象とならぬよう工夫をすることも必要である。
- 以上が、基調講演の骨子であるが、小学校での英語活動（または、教科としての英語）に携わる教員にとって、必要不可欠な視座を提供したのものとして、非常に意義のある講演であった。
- 第1回の最後は、第2回からの講座を中心となって指導する名合智子講師による、次回からの講座紹介がなされた。初回の講座には、倉敷市教育委員会の谷田陽平指導主事の参加や地元の新聞社の取材があり、成功裡に終了した。

2. 中国学園小学校英語活動支援講座 第2回
「国際理解と小学校英語・自己研修の進め方」
（講師：名合智子・佐藤大介）

第2回の講座では、標記のテーマで、二人の講師による講義がなされた。名合智子講師は、この講座を通して使用するテキストとして、『総合的な学習の時間 人とかかわり 国際理解英語活動 年間指導計画』（全92ページの体裁、小学校英語サポート モコ イングリッシュセンター）を作成し、本学での印刷・製本後、参加者に配布した。

小学校における国際理解教育については、低学年、中学年、高学年に分類して、発達段階的に説明があった。つまり、各段階における国際理解の観点、コミュニケーションの観点に分けて、その特色と対応、重点目標が具体的に指示された。低学年や中学年では、音声やリズム中心の指導を、聞かせたり、ジェスチャーや踊りなどの身体表現を通して行うが、国際理解も外国の文化・生活への興味や自国の文化の再認識へと導くようにする。一方、高学年では、知的好奇心への対応として、国際理解関連のタスクを与えるとともに、グループでの取り組みも実施すると、インタラクティブな国際理解教育が可能になることが説明された。その後、参加者に対して、音声指導と実習があり、‘Who is Wearing Green?’ や ‘From head to toe’ などを使っての練習、及び英語の発声に関するポイント、小学校における効果的な指導法や教材として、TPR、マザーグース、チャンツ、絵本、英語劇の紹介があった。

次に、佐藤大介講師による自己研修の進め方の指導があった。小学校の教員は多忙な日常を送っており、担任として、ALTとともに英語活動の指導の準備などが加わり、英語力を高める自己研修をいかにするかが課題となっているのも事実である。まず、現在、英語についての自己研修を、各自どの程度日常的に行っているかを、アンケート形式で把握し、英語力向上のためにはどのような方策が効果的であるかを皆で確認した。次に、佐藤講師によって、日常的に取り組むことができるものとして、使える英会話表現や英単語を増強するためのテキストが紹介され、ラジオ英語講座の聞き方のノウハウ、及び多読の方法論が紹介された。多読は速読と関連しているので、辞書は使用しない、単語が理解できなくても文脈で理解する、など、短時間でも毎日一定時間、英語力向上への努力の一貫として推奨された。その後、皆で実践、最後に講師からのコメントがあった。

3. 中国学園小学校英語活動支援講座 第3回

「クラスルームイングリッシュ①・カリキュラムの立て方」（講師：スコット・チャドウィック、名合智子）

小学校の教室を‘English World’にするためには、ALTもJTEも、生徒達に指示を出す表現も英語、つまり、クラスルームイングリッシュを使用する必要がある。第3回の講座の前半では、そのクラスルームイングリッシュの基本的な表現を実際に発音し、ジェスチャーを付けての練習、学年別のグループに分かれての実際の使用場面のデモを行った。指導にあたったアメリカ人のスコット・チャドウィック講師は、小学校教諭としての現場感覚を持っており、適宜日本語も交えて楽しく指導した。使用したハンドアウトの出典は、『リズムでおぼえる教室英語ノート』（松香フォニックス研究所）である。声に出して、何回も練習した後、各自自校の担当学年で分けられたグループ別に、生徒にゲームをさせる時に言うクラスルームイングリッシュを使い、参加者の前で、各学年に合ったゲームを実演した。1学年のグループは、「グループ作りゲーム」、2・3・4学年は「あいさつ・ジャンケン」であったが、学年が上になるにつれ、ゲームの方法は少しずつ複雑になり、指示のために使うクラスルームイングリッシュの文も数が増えていった。5学年は、「Look 3（あっち向いてホイ）」、6学年は「Wow ゲーム」であったが、参加者達は、児童の気分に戻ったように楽しんでいたのが微笑ましかった。

後半は、名合智子講師による「カリキュラムの立て方」についての講義が行われた。まず、ウォームアップの実例として、Hi-Bye English（松香フォニックス）のカードやCDで、参加の教員同士でペアを作り、ジェスチャーや歌の練習をした。

次に、小学校英語活動のための年間指導計画の講義があった。名合講師による講座用テキストには、各学年別の年間指導計画が詳細に涉って記載されており、これは、スタンダードと言える展開に加えて、独自の視点とアイデアも盛り込み、小学校現場ではすぐに役立つものになっていた。まず、全体目標としては、実践的なコミュニケーション能力と積極的な態度の育成が挙げられた。次にシラバスであるが、単語と文についての導入、一定の場面設定、あいさつなどの表現、話すなどの技能、作業遂行のタスク、各学年の発達段階に合った内容、など

を考慮し、組み立てる必要がある。そして、英語活動の年間計画としては、ルーティーン英会話や英語絵本の使用の他、各学年別の年中行事導入の具体的な例（3学年；七夕、4学年；節分、3～5年；ハロウィン、6年；クリスマス・イースター、など）が紹介された。

4. 中国学園小学校英語活動支援講座 第4回

「レッスンプランの立て方・授業で役立つゲームの実習」（講師：名合智子）

前回の年間指導計画に基づいて、実際の英語活動のレッスンプランをいかに立てるかが、第4回の前半部のテーマであった。まず、小学校英語活動における1時間は45分で、その時間内におさまるべく、活動の導入から評価までのプロセスを計画し、実施することが求められているのが小学校教員の現状である。この講座での活動展開における枠組みのモデルは、「ウォームアップ→ふれる→親しむ→慣れる→使う→振り返る」で表現されるものであった。各ステップにおける目的・使用可能な教材/ポイントとして、

- a. ウォームアップ；既習項目の復習・歌、
- b. ふれる；聞いて理解すること・ビデオ、
- c. 親しむ；まねて確認する・チャンツ、
- d. 慣れる；自分からアウトプットできる；カード
- e. 使う；コミュニケーション活動・ゲーム、
- f. 振り返る；自己評価・相互評価・ジェスチャー、

がある。次にToday's Calendarを使用して、グループ別の授業の練習がなされた。また、4年生まで活用できる『英会話体操』利用の指導法をハンドアウトでの説明の後、①会話形式、②ジェスチャーを付けるやり方、③CD使用でジェスチャー付きの歌を歌うやり方、などで練習する実習を行った。なお、講座用に用意されたテキストには、3学年から各学年別にレッスンプランの例が10例ほど紹介されており、すぐに現場で利用できるような配慮と工夫がなされていた。

後半では、授業で役立つゲームの講習があった。紹介され、練習したゲームは、①自己紹介ゲーム、②Simon says、③フリーズ、④記憶力ゲーム、⑤ビンゴゲーム、⑥ゲッティングゲーム、⑦What's on me?、⑧リズムゲーム、⑨バナナじゃなくてbananaチャンツ、⑩Bring meゲーム、⑪名刺交換ゲーム、⑫グループ作りゲーム、⑬クリスマ

スゲーム3種類、であった。

5. 中国学園小学校英語活動支援講座 第5回

「発音指導①・マザーグース・歌の練習」

（講師：スコット・チャドウィック、名合智子）

前半はまず、スコット・チャドウィック講師が、月末のクリスマスに向けて、クリスマス・ソングである、'The Twelve Days of Christmas' について、その歌詞の内容と成り立ちを説明し、歌い方を指導、全員が各パートに分かれて、合唱した。

次に、英語の発音指導があり、配布資料に沿って、スコット・チャドウィック講師が教員が言うフレーズ、参加者が生徒のフレーズを担当して、音読し、練習した。MEMOコーナーの表現も各学年に分かれて、練習した。各学年の担当は、タップと学芸会のダンス（1学年）、ピアノとダンス（2学年）、柔軟（3学年）、柔軟とフラダンス（4学年）、マジックと早口言葉（英語）（5学年）、体操（6学年）、であった。

後半は、名合智子講師が、マザーグースについて講義と実習を行った。テキストを参照しながら、マザーグースの成立と歴史的変遷について、説明があり、まず、'Mulberry Bush'、'Five Little Monkeys'、'Rain, Rain, Go Away' が紹介された。リズムの観点からは、強弱のリズムの歌として、'London Bridge...'や 'Ring-A=Ring O' Roses' が該当する。ハンドアウトより、'Hot Cross Buns!' と 'Pat-a-Cake, Pat-a-Cake, Bajer's Man' を全員で歌い、手遊び歌としての練習も行った。なお、'Hot Cross Buns!' は、小学校1・2年向きである。'Ring-A=Ring O' Roses' も手遊び付きで歌えるが、小学校3・4年向きである。

'There's A Hole in The Bottom Of The Sea', 'The Farmer In The Dell', 'London Bridge is Falling Down', 'Weather Song', 'Who Is Wearing Green?' (緑の服を着ている人は起立するという活動も利用できるもの) 'Coconut Song' (ローマ字を習う小学校5・6年生に向いている), 'Jelly In A Bowl', などのマザーグースの歌を全員で合唱し、できるものは手遊び歌のジェスチャーを練習した。そして、この回の講座の最後に評価基準について、ハンドアウトを参照しながらの説明があった。

6. 中国学園小学校英語活動支援講座 第6回 「発音指導②・フォニックス・チャンツの実習」

(講師：名合智子)

第6回の講座は、前半部が第二回目の発音指導であった。テキストの子音・母音の箇所(アメリカ英語のs子音表・母音表)を中心に説明が行われ、実際の英語の発音については、腹式呼吸を前提に、破裂音の練習にティッシュペーパーを使用したことが参加者の目を引いていた。つまり、破裂音の発音の際に息が出ているかを、口の前にたらしめたペーパーが息で動くのが確認できるからである。そして、摩擦音、破擦音、側音、鼻音、半母音、と続き、英語の発音を活動として活かす例として、「三匹の子豚」が今回のShow Timeとして披露された。

講師による説明と確認の後、参加者全員が起立して、腹式呼吸と発音の練習を繰り返して行った。また、英語の発音に関する注意事項としては、二つ以上の単語が続く場合の「注意すべき音の変化」がある。その例として、音の連鎖(Liaison)、音の脱落(Elision)、音の同化(Assimilation)について、テキストにある句と文の例を、講師が説明し、その後、参加者全員で口頭練習をした。

後半は、フォニックスとチャンツの講義と実習であった。テキストや配布資料を使用して、フォニックスの指導法が説明され、歌やゲームを参加者全員で実習した。文字と発音の関連を教える時に役立つのがフォニックスであるが、教室では、歌やゲームを通して、楽しく理解させることが大切である。フォニックスアルファベットの読みの練習をしてから、歌やゲームの紹介と練習に取り組んだ。フォニックスの読みは各学年担当のグループに分かれて練習し、歌はCDに合わせて合唱した。ゲームも教える項目に適したものを選定して行う必要がある。例えば、①アルファベットの読みとタッチゲーム/伝言ゲーム、②大文字・小文字に関しては‘Bring me letter’ゲーム、などである。その他、‘Tic-Tac-Toe’や‘Phonics Jingle’などを、CDに合わせて、参加者全員で楽しみながら、実習した。文字指導については、基本的に3文字単語が読めるまでで良いことが指摘された。実際、特区になっている倉敷市でも、小学校6年生で読めることができれば良いとされていることが報告された。そして、名合講師が中心となって、「北風と太陽」がShow Timeとして披露された。これは、6年生用に適

した英語劇として、活用できることに関しても補足説明があった。

7. 中国学園小学校英語活動支援講座 第7回 「英語絵本の使い方と実習・ワークショップ」 (講師：名合智子)

小学校英語活動において、教材としての絵本の使用は、非常に効果が期待できるものである。第7回目の講座は、絵本の使い方の講義とワークショップが行われた。まず、テキストに沿って、絵本の効果、良い英語絵本とは、効果的な読み方、推奨できる英語絵本についての講義がなされた。その後、絵本の実物を使いながらの絵本紹介、及び内容に合わせた活動などの指導と実習があった。

以下の絵本は、この講座で紹介され、実習に使用されたものである。いずれも、ジェスチャーも付けて、CDに合わせて、活動を実践した。

1. *The Foot Book*; 形容詞を教える際に最適のもの。
ゲームはファインディングパートナー(4年生後半～5年生対象)
2. *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*
; 初心者向けの絵本。
3. *Peanut Butter and Jelly*; 生活がテーマ。
4. *The Very Hungry Caterpillar*; ショッピングゲームなどへの応用ができる。
5. *From Head to Toe*; 読みの後は、‘Simon Says’をする。
6. *In A People House*; この絵本の使用については、名合講師が指導した小学校のクラスのビデオを観て、参考にした。ゲームはテリトリーゲーム(日本では陣取りゲーム)。

以上、絵本の紹介と各絵本の内容にマッチした歌やゲームの活動は皆、楽しく参加できた。

後半部では、各自担当する学年グループに分れてのワークショップが行われた。前半部で紹介と指導が指示された絵本を学年ごとに選び、その題材やテーマに合わせて楽しめるゲームなどの英語活動を、グループ全員が分担して発表した。

いつもは、教室内で教師として行動している人達が、時に児童役をするにあたり、ユーモアを醸し出すような言動が出てきて、会場内が一段と楽しさを増す場面もあった。以下は、絵本を使用した英語活動の発表におい

て、各学年グループが選択した絵本の一覧である。

- ① 1 学年; *The Very Hungry Caterpillar*
- ② 2 学年; *The Foot Book*
- ③ 3 学年; *From Head to Toe*
- ④ 4 学年; *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*
カラータッチゲームを導入。
- ⑤ 5 学年; *Peanut Butter and Jelly*
- ⑥ 6 学年; *In A People House*

8. 中国学園小学校英語活動支援講座 第8回

「クラスルームイングリッシュ②・英語表現」

（講師：スコット・チャドウィック，中野宏）

クラスルームイングリッシュの第二回目の講義と演習が、第8回目の講座の前半部であった。スコット・チャドウィック講師は、第3回の講座で使用したテキストからハンドアウトを用意して、クラスルームイングリッシュの会話文のCDを聴いて発音やイントネーションを確認し、参加者全員で一斉練習をした。その後、各文をどのように使うかについて講師から説明があり、次は参加者だけで読む練習をした。

クラスルームイングリッシュの会話文を使う場面は多いが、例えば、クラスでゲームをする時などに生徒達への指示や受け答え、評価などの表現を使う場合の会話文は、ぜひとも覚えて、活用すべきことである。次に学年グループに分れて、ゲームを選び、その内容を説明したり、指示を出す時に使うクラスルームイングリッシュの会話文を練習した。各学年グループが選択したゲームは以下の通りである。

- ① 1 学年; クラップゲーム
- ② 2 学年; ビンゴゲーム
- ③ 3 学年; タッチゲーム
- ④ 4 学年; フード・ボーンゲーム
- ⑤ 5 学年; フルーツバスケット
- ⑥ 6 学年; カウントゲーム

後半部は、中野宏講師による英語表現の講義であった。用意したハンドアウトに沿って、まず、講師が把握している子ども像について、過去と現在との比較をする観点で説明した後、以下の項目に分けて講義がなされた

I. 教師の英語力を高める方策について、

- (1) 4技能をバランス良く習得しておくこと。

- (2) interlanguageに該当する部分を増やすこと。
- (3) 教材研究は生徒の視点からを重視する。
- (4) 絵やビデオなどの視覚教材を多用し、繰り返し聞かせ、真似をさせる。
- (5) 発表させ、出来具合をプラスの評価にする。
- (6) ゲーム的活動を増やす。

II. 英語表現に関心を持ち、教員自身が楽しく英語を学ぶことが大切である。そのためには、

- (1) 語彙については、身の回りの言葉から始めて、類似の表現を増やしていく。
- (2) 5文型や、句・節から内容の理解を高める。
- (3) 辞書・英文法の参考書などを活用する。

9. 中国学園小学校英語活動支援講座 第9回

「モデルレッスン・課題に沿ったレッスンプランの作成」

（講師：名合智子，柏野恵理子，藤井佐代子）

第9回目の講座は、小学校現場で実際に英語活動に取り組みながら、研鑽に励んでいる二人の教諭の講義が、約45分間ずつ前半部に行われた。

まず、1学年から3学年の英語活動について、岡山市立岡山中央小学校の柏野恵理子講師が「学級担任が主体の英語活動の授業」の題目で講じた。以下、項目に分けて、その講義を報告する。

1. 学級担任が主体の授業について

- 学級担任は、担任という役割が担うさまざまなプラスの側面から、英語活動においても、子どもの実態に則した指導が可能である。
- 担任主体の授業を可能にするための校内体制、つまり、年間計画の工夫や、資料の共有化への努力をすること。

2. 1～3学年の児童の特徴とアプローチの仕方

- 低学年:「活動そのものを全身で楽しむ」
- 中学年:「聞いたり答えたりする会話運びを楽しむ」
それぞれの特徴に合致した指導のポイントも示唆された。

3. 実際の授業のポイント

4. 学級担任単独による授業例、年間計画、など。

次に、4学年から6学年の指導については、「知的好奇心と遊び心をもつ高学年の英語活動」というテーマで、岡山市立西小学校の藤井佐代子講師が講義を行った。そ

の講義の要旨は、以下の通りである。

1. 年間計画・活動案作成の基本的な考え

○6年生の最終目標を「自分のことを英語で話す」ことにした。高学年の発達段階を考慮に入れ、ゲームも知的好奇心にふれるようなものにした。

2. 「めあてカード」使用の意義について

○児童が「自ら学ぶ意欲」と「わかるよこび」をもつことができるための方策であり、生徒ひとり一人が授業での活動を振り返って、自分の努力を自覚・反省させるために必要なプロセスである。

3. 英語活動・国際理解教育 年間計画題材一覧

4. 6年生のレッスンプランの一例

○活動の展開と留意点が示され、写真も印刷されているもので、綿密なプラン構成の一例といえる。

5. 「めあてカード」について

○このようなカードを利用することにより、教員側と生徒側の相互評価が可能になる。

○段階別の記号による記入と、感想を書くという自由表記を併用することにより、生徒の自覚が促せる。

また、後半部では、次回のモデルレッスンに向けて、各学年グループが、選択したレッスンのテーマ、題材、必要な教材・資料、などを相談しつつ、教材作成などにとりかかり、意欲ある活動が見られた。

そして、この講座のお知らせ事項として、名合智子講師から、ホームページ (<http://www2.oninet.ne.jp/nago-h>, 2006. 2. 4～現在) の開設と各小学校の英語活動に役立つデータ・ベースが載せられる旨のお披露目があった。

10. 中国学園小学校英語活動支援講座 第10回

「グループによるレッスン発表・修了式」

(講師:名合智子, 修了証書授与:中野宏)

第9回目で、各学年グループが用意を開始し、この最終回に向けて、力を合わせて準備した成果が発表された。前半部は1～4学年グループのモデルレッスンで、後半部は5～6学年グループが発表した。

各学年グループは、講座開始後15分間、最後の打ち合わせと練習をして、モデルレッスンの発表に移った。

以下は、各学年グループの発表をごく簡単に記したものである。

1 学年 ; 「体の部位について」

○体の部位についてカードで導入し、CDに合わせて歌を歌った。ゲームは福笑い。

2 学年 ; 「あいさつ・色」

○歌で表現を導入し、表現練習を行った。絵本、色カード・色さいころなどを使用し、‘coffee song’のフレーズで練習を重ねた。

3 学年 ; 「動き」

○歌やジェスチャーで表現を導入し、CDに合わせて動作をし、ゲームも実施。

4 学年 ; 「天気」

○CDに合わせて歌い、‘world weather デモ’やカード使用での練習をした。ゲームは‘what missing game’。

5 学年 ; 「職業」

○ウォーミングアップとしてのあいさつ、チャンツ、ゲームは‘card exchange game’、歌は‘I have joy’。

6 年生 ; 「どこから来たの？」

○‘hello song’を歌って導入し、ゲームは‘where are you from? Game’。‘good bye song’で終わる。

以上のモデルレッスンに対して、名合講師からコメントがあった。発表は、各学年レベルに合致しており、チャンツや歌などが使用されていて、先生方の指導力に感心したこと、及び、今後の課題として、単語などの発音練習などがあるので、中野講師配布のプリントなどを参照して、引き続き努力をしてほしい旨の内容であった。

最後に、この講座の修了式が行われた。中野講師と名合講師により、8回以上の出席者には、本学作成の修了証(日英併記)が授与された。また、平成18年8月に実施予定の本学での「児童英語教育講座」や、岡山県下で開催される講習会・講演などの紹介がなされた。多忙な時間を割いて、小学校の英語活動指導のために参加して下さった公立小学校の先生方と本学の関係者ともども、この講座で学んだ多くの指導に関するノウハウを活かしつつ、今後も精進することを確認して、全講座は成功裡に終了した。

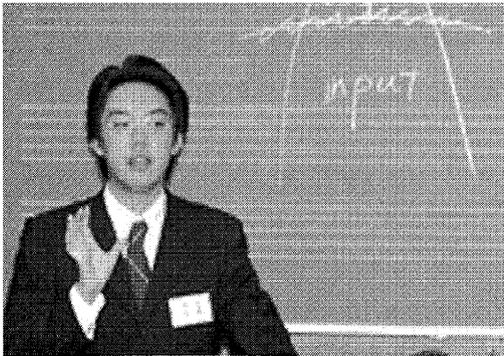
Ⅲ. 終わりに

本学の「中国学園小学校英語活動支援講座」が、平成18年2月18日に終了した約1ヶ月後の3月27日に、中央教育審議会の外国語専門部会は、「小学校における英語必修化」の提言をまとめた。つまり、「5年生から週1時間程度を必修化する」必要性を打ち出したのである。現在でも、英語活動が全国の9割以上の公立小学校で実施されている実情を鑑み、この提言が出されたわけであるが、導入の時期も学習指導要領の改訂の時期に合わせて、移行期間を含めて4～5年先になる模様である。

文部科学省小学校英語活動地域サポート事業は、この

必修化に向けての長期間の議論の結果を待たずして、平成17年度に始まった事業であり、たとえ30地域という枠であってもその事業の持つ意義は大きく、その成果は将来の布石の一助になるものと信じたい。幸い、本学では、児童英語教育に関する高等教育機関としての体制固めは着々と進展している。課題も山積しているが、将来の展望に向かって、益々の進展を図りたいと考えている。

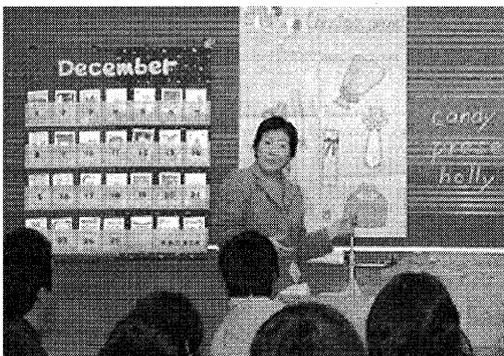
最後になりましたが、この講座実施につきまして、岸田嘉一学長(平成18年3月31日現在)を始め、学内の各部署、及び教職員の方々のご支援とご協力を賜りました。この場をお借りして、深く感謝の意を表したいと思えます。



佐藤大介講師（平成17年10月22日）



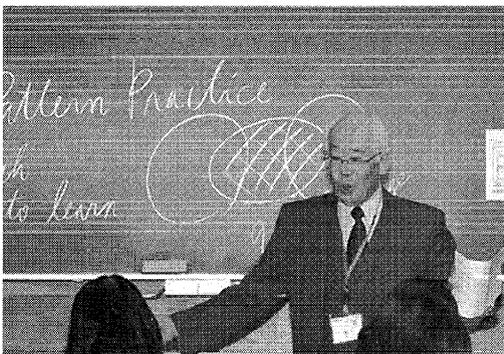
スコット・チャドウィック講師（平成17年11月12日）



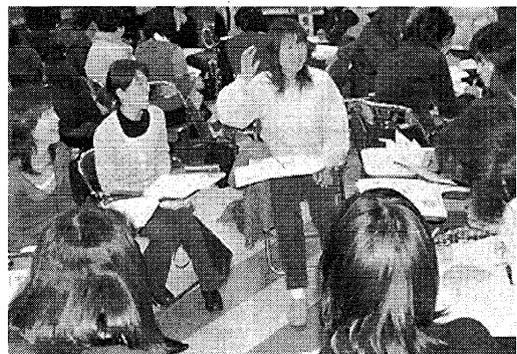
名合智子講師（平成17年11月19日）



名合講師とお手伝いの学生（平成17年12月17日）



中野 宏講師（平成18年1月28日）



グループ活動（平成18年1月28日）